

上級マクロ経済学 Summer 2007 講義ノート (RBC)

by Naohito Abe
x8347
nabe@ier.hit-u.ac.jp
2006 September

Real Business Cycle (RBC)、または Dynamic Stochastic General Equilibrium (DSGE) の線形近似法による解法を説明する。具体的な構成は以下の通りである。[1] 参考文献等、[2] 歴史的経緯、[3] モデルビルディングに際して、[4] モデル、[5] 線形近似手法、[6] カリブレーション、[7] 線形近似手法による具体的解法、[8] Impulse Response Functions、[9] Matlab Programs、[10] 結果。

1 参考文献等

Romer[2006] を終えた後、マクロ経済学に関する包括的な教科書としては、理論に関しては Sargent and Ljungqvist [2004] (第十二章が RBC)、より応用を重視した教科書としては Adda and Cooper [2003](5章が RBC) が定評がある。とくに RBC に関する教科書としては、多少古くなったが

Thomas F. Cooley ed. [1995] *Frontiers of Business Cycle Research*, Princeton University Press.

である。これは論文集であるが、最初の章が導入用のテキストとしてよく書かれている。また、不完全競争や国際経済、金融への応用も詳しく述べられており、この分野で論文を書こうとするものであれば、持っている価値は十分にある。

ただ、実証分析にはまったく触れておらず、多少偏っていることは否めない。マクロの実証研究手法に関しては

Carlo A. Favero [2001] *Applied Macroeconometrics*, Oxford University Press.

が計量の基礎から VAR, Cowles Commission Approach, GMM および Calibration にわたる広範囲な方法論に関して簡潔にまとめている。

現在、マクロ経済学の分野で研究をする場合は、高価であるが

John B. Taylor and Michael Woodford Ed. [1999] *Handbook of Macroeconomics 1A, 1B, and 1C*, North-Holland.

を手元に揃えておくと良い。景気循環、成長、失業、投資、消費、数値解析、ミクロ計量的視点からのマクロ経済学や政策分析等、多くの分野に関する一流の

研究者達によるサーベイおよび文献リストは、研究のスタートとして、投資額に見合う価値がある。

RBC、または不確実性下の動学一般均衡の数値解析に特化した学生向けの教科書として、

Craig Burnside [1999] “Real Business Cycle Models: Linear Approximation and GMM Estimation”, The World Bank, mimeo.

私は大学院生の頃によく読まれていたものであるが、今でも、HP-Filter や GMM、単位根検定等の実証上の技術に関して簡潔にまとめており、優れたものである。

近年では、毎年、様々な研究者による新しい講義ノートが web で閲覧可能になってはいる。最近では

Christopher D. Carroll[2005] “Lecture Notes on Solution Methods for Representative Agent Dynamic Stochastic Optimization Problems”, Johns Hopkins University.

ちなみに、Carroll の web には色んな講義ノートが掲載されている。詳しくは下記の web を見よ。

<http://www.econ.jhu.edu/people/ccarroll/public/lecturenotes/>

その方は

Harad Urlig [2005] “A Toolkit for Analyzing Nonlinear Dynamic Stochastic Models Easily”, University of Tilburg, and CEPR.

Chris Edmond [2004] “Advanced Macroeconomic Techniques ” New York University.

Dirk Krueger (<http://www.wiwi.uni-frankfurt.de/professoren/krueger/QuantMacro.html>)

Cochrane [2001] (http://www.e.u-tokyo.ac.jp/~toni/Advmacs2/Coch_rbc.pdf)

が入手しやすく、また読みやすい。ただし、Carroll のテキストでは、コードが Mathematica で書かれているので、Matlab 等には自分で変換する必要がある。数値解析に関する教科書としては、まずは、計量経済学の教科書であるが、

William H Greene [2003] *Econometric Analysis, Fifth Edition*, Prentice Hall.

の Appendix E からはじめるのが良いと思われる。計量経済学への応用を念頭において極めて簡潔に解説しており、どのような数値解析の技術が存在し、利用されているかの、大雑把なアイデアをつかむのに適している。最適化に関しては多くのページが割かれており、非常に参考になる。

より一般的な数値解析の入門書としては下記の三冊が適している。

Marimon and Scott ed. [1999] *Computational Methods for the Study of Dynamic Economies*, Oxford University Press.

Miranda and Fackler [2002] *Applied Computational Economics and Finance*. MIT Press.

Kenneth L. Judd. [1998] *Numerical Methods in Economics*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

特に、Judd [1988] は名著と言われており、あくまで経済学への応用を前提にしながら、かなり厳密かつ実践的に、数値解析を行う際の注意事項を解説している。Marimon and Scott [1999] や Miranda and Fackler [2002] のようなより応用に徹した教科書、あるいは論文集を中心に勉強する場合、数値解析の基本を知らずに応用すると基本的な間違いをしでかす恐れがあることに注意すること。

さらに勉強を進める場合は

Hans M. Amman, David A. Kendrick, and John Rust [1996] *Handbook of Computational Economics*, vol1, North Holland.

が、非常に多くの経済諸分野における数値解析の応用およびその基礎に関して説明しており、参考になる。

自分でプログラムを書くときでも、実際には他人の書いたコードを参考にす、あるいはそのコードの一部をそのまま使うことが多い。微分や数値積分については、すでに多くのコードが書かれており、数学パッケージとして C や Fortran のために提供されているし、一部は Matlab や Gauss でも利用可能である。古典的なものでは

Press, Teukolsky, Vetterling, and Flannery による一連の Numerical Recipes シリーズがある。便利な数値手法の解説とコードを C, C++, Fortran90 や Fortran77 で提供しており、古本屋で安く見つけられたら購入しておくことをお勧めする。ただ、最近では IMSL 等の市販の数値解析パッケージでかなりカバーされてしまうようであるが。。

最適化アルゴリズムの改善はかなりのスピードで進められているので、John Rust 達等、数値解析に関して優れた論文を書いている人々の web を定期的にチェックすることをお勧めする。

なお、日本語の文献では、工学部用に大量の教科書が書かれているが、たとえば

水島二郎、柳瀬眞一郎 [2002] 「理工学のための数値計算法」数理工学社
森正武、室田一雄、杉原正顕 [1992] 「数値計算の基礎」岩波書店
の二冊は Chebyshev Polynomial による関数近似に関する記述がある。

RBC の論文の中では、古典的な

Kydland and Prescott [1982], “Time to Build and Aggregate Fluctuations”, *Econometrica* 50.

Long and Plosser [1983], “Real Business Cycles”, *Journal of Political Economy* 91.

が代表であるが、どの古典にも言えるように、現在読むには骨が折れるかもしれない。しかし、この分野の呼び水となった論文であり、マクロを専門にする場合必読と言える。

おそらく、読みやすいのは

Gary Hansen [1985], “Indivisible Labor and the Business Cycle.” *Journal of Monetary Economics*,16.

であろう。これは非常に単純な動学一般均衡による景気循環モデルであり、現在では Benchmark Model としての地位を獲得している。その後の展開に関しては、以下の二つが参考になる。

Burnside, Eichenbaum, and Rebelo [1993] “Labor Hoarding and the Business Cycle.” *Journal of Political Economy*.

King, Plosser, and Rebelo [1988a, b] “Production, Growth and Business Cycles, I, II.”, *Journal of Monetary Economics*, 21.

特に後者は、Cooley による本が出る前はテキスト代わりによく読まれていた。

初期の RBC モデルは、動学最適化問題を解く際、1970 年代以降の合理的期待モデルの解法を利用していたが、その解法のエッセンスは以下の有名な論文に簡潔にまとめられている。

Blanchard and Kahn [1980], “The Solution of Linear Difference Models under Rational Expectations.” *Econometrica*, 48.

Blanchard and Kahn [1980] はその短かさにかかわらず便利な応用例がいくつか紹介されており、現在読んでも得るものは大きい。まずこれを読み、基本的な解法のストーリーを把握した上で、上記の King, Plosser and Rebelo [1988]、または Burnside [1999] に取り掛かるのも良い道筋だと思われる。

てっとり早く、90 年代後半までに書かれた RBC に関する様々な論文を集めるには (批判や実証分析も含めて)

Hartely, J., K.D. Hoover, and K.D. Salyer [1998] *Real Business Cycles, A Reader*, London, Routledge

が便利である。Summers による有名な批判、Prescott による反論、その後、徐々に数値シミュレーションだけではなく、統計分析に RBC が発展していく様子を伺うことができる。特に、実証分析手法に関して多くの文献が集められており興味深い。また、最初の二章は RBC 入門用に書かれた教科書のようなものであり、一読の価値はある。もっとも、Heterogenous Agents や国際経済、不完全競争市場への応用等は触れられていないことには注意せねばならない。

RBC は、1980 年代前半に始まり、アルゴリズムの改良による分析可能な経済現象の拡大を通じて、現在まで非常に活発に分析が行われており、論文のリストを作ることは、近年のアメリカにおけるマクロ経済学の研究リストを作ることにほぼ等しい作業となる。近年では RBC に対する批判的な論文が増加しているが、今でも十分に ACTIVE な分野である。最近で、とても RBC 的と思った論文を数本上げると

Lawrence Christiano, Martin Eichenbaum and Robert Vigfusson [2004] “What Happens After A Technology Shock?”, mimeo, Northwestern University.

Neville Francis and Valerie A. Ramey [2003] “Is the Technology-Driven Real Business Cycle Hypothesis Dead? Shocks and Aggregate Fluctuations Revisited” forthcoming *Journal of Monetary Economics*.

Jordi Gali [2004] “On the Role of Technology Shock as a Source of Business Cycles: Some New Evidence” *Journal of the European Economic Association* 2(2-3) (Papers and Proceedings), 372-80.

であろうか。

日本経済を対象にしたものとしては、極めて影響力の高いものには下記のものがある。

Fumio Hayashi, Edward C. Prescott [2002] “Japan in the 1990s: A Lost Decade” ,*Review of Economic Dynamics*, January.

この論文の影響で、日本で一気に RBC 的な論文が増加している。もっとも、Fundamental Parameters の考察等、まだまだ研究の蓄積が足りないという印象は否めない。

2 マクロ経済学のミクロ的基礎づけに関して

実物景気循環 (RBC) モデルには (1) Stylized Facts に基づくモデルの目標設定、(2) 個人合理性と市場均衡をベースとするモデルビルディング、(3) カリブレーションおよび数値解析によるモデル評価、の 3 つからなるフレームワークが存在する。(1) に関しては次節で、(3) に関してはその次に説明する。本節では (2) の意義について述べる。

例えば、我々の関心が、マクロの家計消費の動向にあると仮定しよう。現在の家計消費水準は低すぎるのか、高すぎるのか。今後どのようになっていくのか。また、消費減税や失業保険、介護保険等の政策はどのような影響をもたらすのか、等等、消費は常にマクロ経済学や政策分析において中心課題であった。消費の動向を分析する際に考えられるフレームワークには様々なものが考えられる。一昔前であれば、消費と国民所得との相関を中心に、マクロ計量モデルを作り上げ、過去の実現値に基づきモデルのパラメータを推定、あるいは設定し、様々な政策効果や将来予測を行うことが行われてきた。また、今でもマクロ計量モデルは政策当局において使われている¹。このようなマクロ計量モデルはケインズ体系に基づき、フィリップス曲線および IS-LM に基づくものと考えてよいだろう。また、異なるアプローチとしては、フィリップス曲線や IS-LM という経済構造を無視し、消費や所得といったマクロ諸変数の相関をより重視し、最低限の構造のみをデータに課す VAR によるアプローチも存在する。

個人合理性と市場均衡を重視してマクロモデルを構築するアプローチはケインズ体系や VAR とは大きく異なるものである。異なる第一点は、経済主体の行動が将来予測を含んだ最適化行動の結果として扱われるため、Lucas 批判の対象とはならないこと。第二点は、均衡解が一意に定まることにより、データの構造に関して多くの制約を課し、様々な検証可能な含意をもつようになること。第三点として、標準的なミクロの一般均衡モデルに準拠することにより、拡張が比較的容易であること、等があげられる。無論、問題点も数多く存在する。例えば、価格の硬直性等、ある種の仮定を導入する際には、かなり強い仮定を設けない限り均衡を解くことができなくなること、それゆえ、モデル解析に適合する経済問題に関心が集中する傾向にあること等である。ただ、後者は、数値解析技術の発展により、10 年前と比較すると飛躍的に分析可能な対象は増えていることを指摘しておく。

個人合理性に準拠するもう一つの利点は、マクロの問題をミクロ経済分析に基づいて分析することが可能になることである。例えば、マクロの消費は、ミク

¹<http://fairmodel.econ.yale.edu/>では、この種のマクロ計量モデルを実際に使った政策分析を容易に実験することができる。時間のあるときに Ray Fair により運営されているこのサイトを訪れることをお勧めする。

口の消費の集計値として定義される。個々の家計消費は、オイラー方程式に基づいて決定されると仮定すると、特殊な仮定をおかない限り、オイラー方程式は消費の非線形な関数となる。すなわち、

$$\sum c_{t+1i}^\rho = \sum f(R_{t;1}) c_{ti}^\rho$$

のような形となる。一方、マクロの消費は

$$C_t = \sum c_{ti}$$

で定義されており、 ρ が1でない限り、家計消費に関するオイラー方程式を集計量のマクロ消費に当てはめることはできなくなる。もしも、家計行動をミクロの分析し均衡解を求め、モデルの中でそれを集計し、結果として生じるマクロ消費の分析を行うことができるのであれば、集計問題を回避することが可能である。このような、多くの異質な家計をベースとしたマクロ分析はまだ端緒についたばかりであるが、今後のマクロ経済学の進化の道を示すものと考えられている。

この講義ノートでは代表的家計に基づくシンプルな景気循環モデルのみを考える。また、複雑な計算を避けるため、微分可能な世界のみを考える。しかしながら、極めて単純ではあるものの、その応用可能性は広く、また異質な個人や微分不可能な世界を考える上でもベンチマークモデルとしての価値はおそらく今後続くと思われる。さらに、以下で説明するモデルはRBC研究に初期において標準的モデルとしての地位を獲得したものでもあり、その特性を知ることは今後研究を進めていく上で極めて重要である。

3 モデルビルディングに関して

いかなる経済モデルも現実の経済現象の全てを描写することはできず、極めて単純化された現象しか描写することしかできない。したがって、経済モデルを組み立てるときには、何を分析するためのモデルであるのかを明確にする必要がある。

以下はKaldorのStylized Factsと呼ばれSolowが簡略化したものであり、経済成長モデルを組み立てるときの目標の一部となっている。

- (1) 実質生産高は、およそ一定の率で成長する。
- (2) 実質資本ストックは、労働力よりも高い率で成長する。
- (3) 実質生産高と資本ストックの成長率はほぼ等しい。
- (4) 資本収益率は成長しない。
- (5) 一人当たり所得の成長率は国により差がある。
- (6) 所得に占める利潤の率が高い経済では、投資・生産高率が高い。

Solowに始まる経済成長モデルは、一連の発展、拡張を通して、以上の“事実”をよく説明することができる。次に、Romer[2001]のp.169の図(4.1)を見ると、アメリカ合衆国における実質国内総生産の戦後の動きがわかる。対数スケールになっているので、実質生産高が一定の率で成長してきていることが確認できる。しかし、完全な直線ではなく、景気循環と我々が考える現象が頻繁に起きていることも確認できる。

RBC または Dynamic Stochastic General Equilibrium アプローチがそれまでの景気循環理論と異なる点は、議論の出発点を、上記の図に持ってきたことである。それまでの景気循環理論、特に Keynesian 達によるものでは、出発点は Phillips 曲線であったことと対照的である。彼らは、景気循環の原動力と、経済成長の原動力の間に密接な関係がある、と仮定したわけである。その理由の一つは、以下のようなものであったと思われる。Solow による経済成長の要因分解 (Growth Accounting) によると、経済成長の 1/3 は資本ストックの増大に、2/3 は技術革新によるものである。すなわち、技術革新が成長に大いに貢献しているのである。しかし、技術革新そのものを観察することはできず、推定の際の残差 (Solow Residuals) としてしか観察できない。生産性を向上させるような技術革新として、CPU の高速化、流れ作業の導入などの革新は確かに存在する。一方、オイルショックのような外生要因を考えることもできる。石油価格の上昇は生産コストの上昇、すなわち生産性の低下と同じ効果をもたらす。負の残差が発生する可能性もあるということである²。今、2007 年において、石油価格は歴史的にいくらい高い水準にある。この経済効果を、標準的な経済成長モデルで分析してみよう。日本経済を念頭に置き、石油価格を外生と考えることにする。石油価格の上昇は、石油を生産に用いる財の生産を減少させることになる。次に、資本の生産性が低下することから資本収益率を低下させ、投資を減少させる。投資の減少は将来の資本ストックの減少をもたらす、将来の生産水準の低下を引き起こす。すなわち、石油価格の上昇が生産に与える影響は、当期にとどまらず、将来にもわたるのである。Solow Residuals の変化は、生産水準の (比較的) 長期的な変化を引き起こすのである。RBC、または DSGE モデルの初期の研究者達は、この成長モデルのもつ特性が、景気循環の説明のベースになりうると考えたのである。

それでは、景気循環を成長モデルで説明する場合、景気循環のどのような側面の説明を目標にすべきなのであろうか?初期の RBC の研究者がまず行ったことは、主要なマクロ変数の時系列を並べることであった。具体的には、GDP、非耐久消費財、投資、政府支出、雇用、賃金などである。無論、これら全ての変数は、長期トレンドをもっている。成長モデルに従えば、この長期トレンドの源泉は生産性の向上である。しかし、景気循環の源泉も Solow Residuals の変動に求めるのであれば、この長期トレンドは単なる直線ではなくなる。長期トレンドは、ふらふらと動き景気循環を引き起こす Solow Residuals の変化が、長期的には上昇傾向にあることから生じることになる。

GDP 等のマクロ時系列の長期トレンドと景気循環を識別することは難しい。計量経済学的には、データを定常にする作業ということになり、階差を次々と取っていくことができるし、線形トレンドに回帰し、その残差として捕らえることもできる。前者は、指標に測定誤差がある場合は、その影響を拡大させてしまうし、また階差をとることで定常化しすぎる可能性がある。また、後者ではトレンドが線形である必然性がなく、例えば、高度成長期と現在の日本の長期トレンドが同じであると考えることには大分無理があるであろう。

一つの慣例として用いられる手法として、Hodric-Prescott のフィルター (the H-P filter) と呼ばれるフィルターを用いて長期トレンドを除去することがよく行われている。具体的には、各系列、例えば y_t を以下の式を最小化させるような二つの components (y_t^c, y_t^g) に分離するのである。なお、 y_t^c は Cyclical Component

²無論、資本や労働の測定誤差、または基礎となっている生産関数そのものが間違っている場合にも Solow Residuals は発生する。

であり、 y_t^g がトレンド Component である。

$$\text{Min} \sum_{t=1}^T (y_t^c)^2 + \lambda \sum_{t=2}^{T-1} [(y_{t+1}^g - y_t^g) - (y_t^g - y_{t-1}^g)]^2, \quad (1)$$

$$y_t = y_t^c + y_t^g. \quad (2)$$

λ は、四半期では 1600 に設定する³。第一項は変動項、第二項は成長項を示す。 $\lambda = 0$ のとき、解は変動項のみとなり、このフィルターの解は実際の系列と一致する。逆に λ が非常に大きい場合は、成長率が一定の単なるトレンドとなる。 λ を調整することで、除去する変動の周波数を調整することができる。 $\lambda = 1600$ のとき、このフィルターは 8 年以上の低周波を除去することが知られている⁴。このフィルターを用いることにより、Solow Residuals の長期的な傾向と、短期的な傾向を分離することになるのである⁵。表 1 は Cooley ed.[1995] からとってきたものであり、アメリカ合衆国のマクロ諸変数を、上記の H-P filter をかけ、さらに各変数の Cross Correlation を調べたものである。

やはり、Cooley ed.[1995] に従い、この表から読み取れることを整理すると、以下ようになる。

(1) 総生産の変動と労働時間の変動の大きさはほぼ等しい。表では前者は 1.72、後者は 1.59 or 1.69 である。

(2) 雇用者の一週間の平均労働時間の変動は小さい。これは、調整されるのは時間ではなく雇用であることを示唆している。

(3) 非耐久消費財は smooth であり、変動は小さい。

(4) 投資、耐久消費財は総生産よりも変動が大きい。

(5) 労働の平均生産性の変動は小さく、わずかに Pro Cyclical である。

(6) 賃金は平均生産性よりも変動が小さい。

(7) 政府支出は総生産との相関はほとんどない。

である。これらの現象を再現するようなモデルを作ることが、初期の RBC の目標であった。

なお、近年では H-P filter そのもの、および λ の値に関して批判的な研究が増加しており、昔のように H-P filter のみが主流の Detrending Method とは言えなくなっている。たとえば、

³Annual の場合は 100、Monthly の場合は 14400 に設定するのが慣習となっている。もっとも近年ではこのような恣意的な設定に対してはかなり厳しい批判が浴びせられている。後で多少説明する。

⁴Burnside[1999] には、H-P filter に関する詳しい説明が書かれているが、周波数領域に関する基本的な知識を前提としている。周波数領域に関して興味のあるものは、山本拓氏の『経済の時系列分析』の最後の章が参考になる。

⁵このフィルターは、現在では多くの統計パッケージで利用可能である。Eviews や TSP 等の時系列分析に強みのあるパッケージは無論、Stata 用にも下記の web から入手することもできる (<http://ideas.repec.org/c/boc/bocode/s447001.html>)。

Ravn, Morten O. and Uhlig, Harald, “On Adjusting the HP-Filter for the Frequency of Observations” *Review of Economics and Statistics*, Vol. 84, Issue 2 - May 2002.

は annual データの λ は 100 でなく、6.25 にすべきであると論じている。また、異なる手法としては

Baxter and King [1999] “Measuring Business Cycles: Approximate Band-Pass Filters for Economic Time Series” *Review of Economics and Statistics*, Vol. 81, Issue 4 .

は Band-Pass filter を提唱しており、プログラムも簡単に入手可能である。問題は、上記の stylized facts と呼ばれるものが、filter が異なるとだいぶ値が異なってくるのである。このあたりに関しては当然のことながら、膨大な量の論文が書かれている。まずは下記の二つの論文が starting point としてよいと思われる。

Favio Canova.[1998], “Detrending and Business Cycle Facts”, *Journal of Monetary Economics* 41, 475—512.

Timothy Cogley and James M. Nason [1995] “Effects of the Hodrick-Prescott Filter on Trend and Difference Stationary Time Series”, *Journal of Economic Dynamics and Control* vol 19.

無論、この他にも数多くの論文が書かれているので、興味ある人は上記や Perron 達の web をチェックすること。

日本の経済に関しては、残念ながら Stylized Facts と言われる物は十分に蓄積されていない。日本経済の特徴としてこれまで、高い貯蓄率、比較的平等な社会、系列やメインバンク等について多くのことが言われてきており、それぞれ多くの論文が書かれているが、広くコンセンサスとなっているような「事実」はあまり存在しない。最近の貯蓄率が低下しているのか、上昇しているのかすらはっきりとはわからないのである。この背景には、ミクロデータの不備があるとはいえ、やはり、すぐれた実証研究の蓄積が足りないことが否めない。

4 モデル

前章の Stylized Facts の再現をモデルの目標として設定する場合、単純な経済成長モデルでは確率的要素も雇用変動も存在しないため、そのままでは不十分である。しかしながら、単純な成長モデルは基本モデルとして良い Starting Point となる。本節では、まず、基本的な成長モデルから出発する。

最適経済成長モデルでは、新古典派的な想定に依拠する限り、厚生経済学の第二基本定理を用いることで、市場の一般均衡は政府による代表的個人の厚生最大化問題の解として支持 (support) される事が示されていたと思う。したがって、最適成長モデルの問題は、人口成長を無視すれば以下のように定式化することができる。

$$\text{Max} \int_0^{\infty} e^{-\rho t} u(c_t) dt, \quad (3)$$

$$\text{s.t.} \quad \frac{dk_t}{dt} = f(k_t) - \delta k_t - c_t \text{ for all } t, \quad k_0 > 0: \text{ given.} \quad (4)$$

ここでの我々の目標は、前節で提示された景気循環の性質を再現するためのモデルを組み立てることにあり、多少の変更を加える必要がある。まず、成長モデルでは連続時間を用い、総効用は時間に関する積分で表されているが、データとのフィットを考えると、連続時間よりもデータの単位期間とあわせる方が比較を行いやすい。国民所得計算は1年間に4回発表される、4半期データである。それに対応するように、時間の単位を4半期ごとに1単位進むと仮定し、離散時間書き直す。すなわち、

$$\text{Max} \sum_{t=0}^{\infty} \beta^t u(c_t), \quad (5)$$

$$\text{s.t. } k_{t+1} = f(k_t) + (1 - \delta)k_t - c_t \text{ for all } t, \quad k_0 > 0: \text{ given.} \quad (6)$$

主観的割引率 ρ を、主観的割引因子 β で定義しなおしていることに注意せよ。

次に、成長モデルでは雇用は一定とされているが、景気循環における雇用の役割が大きいことは明らかなため、雇用の変動をモデルに組み込む必要がある。雇用の変動を組み込む手法には様々なものがあるが、一番単純なケースは、家計が労働と余暇消費の選択をおこない、賃金が余暇と消費の限界代替率に等しいところまで労働を供給し、企業は労働の限界生産性が賃金に等しい水準まで需要すると仮定することである。そこで、瞬時的効用関数を以下のように仮定する。

$$u(c_t, 1 - l_t) \quad (7)$$

l_t は家計による労働供給であり、 $1 - l_t$ は余暇消費にあたる。単位期間当たり、余暇が労働にあてることのできる時間を1に基準化してある。

同様に、生産サイドにも労働を明示する必要がある。それと同時に、このモデルの最大の特色の一つである、生産性ショックも生産サイドに導入する必要がある。具体的には、以下のような生産関数を仮定する。

$$y_t = e^{z_t} F(k_t, l_t), \quad (8)$$

z_t は生産性に対するショックであり、一階の自己回帰 (AR1) に従うとする。すなわち、

$$z_{t+1} = \eta z_t + \varepsilon_{t+1} \quad (9)$$

ここで、 ε は平均値ゼロの同一の正規分布に従い、各期間で独立であるとする (i.i.d.)。また、 $0 < \eta < 1$ を仮定する。この仮定のもとでは、 z_t は長期的には0に収束し、発散する可能性は非常に少なくなる。なお、 η が正の値をとる、ということは生産性ショックには正の系列相関があることを意味する。 ε が i.i.d. である、ということは、生産性ショックは経済諸変数に影響を与えることはあっても、それらから逆に影響を受けることはなく、外生であることを意味する。経済理論では説明できない、ショック要因として扱うということである。⁶ 技術ショックの導入の仕方には様々なものを考えることができるが、上記の定式化は最も単純なものである。なお、AR1の生産性ショックを導入することにより、この経済の消

⁶ なお、上記の定式化は Romer[2001] と若干異なるが、線形近似すると同一の結果となる。

費者は不確実性に直面することになる。現在、2005年の時点では、2006年の技術に何が起きるかわからないということである。このような不確実性に直面する場合、標準的な経済学では、消費者は効用の期待値、すなわち期待効用を最大化すると定式化する。ここでもそれに従うことにする⁷。ただし、注意せねばならないことは、標準的なミクロ経済学に従い人々が合理的であると仮定する場合⁸、現在利用可能な情報を元に、将来を予想する、条件付期待値を最大化することになることである。t期における条件付期待値を E_t と表記すると、消費者の最大化する効用は以下のように定義される。

$$E_o \left[\sum_{t=0}^{\infty} \beta^t u(c_t, 1 - l_t) \right]. \quad (10)$$

たとえ不確実性が導入されていても、市場が完全完備であると仮定する限り、この経済の均衡はパレート効率的となる。また、生産関数が標準的な新古典派の性質を満たす限り、厚生経済学の第二基本定理が適用可能であり、資源制約を用いて消費者の厚生を最大化する解は、一般均衡としてある価格体系で再現 (support) される。したがって、我々のモデルは、以下のように定式化することができる。

[基本モデル]

$$\text{Max } E_o \left[\sum_{t=0}^{\infty} \beta^t u(c_t, 1 - l_t) \right], \quad (11)$$

$$\text{s.t. } k_{t+1} = e^{z_t} F(k_t, l_t) + (1 - \delta) k_t - c_t, \text{ for all } t, \quad k_o > 0: \text{ given}, \quad (12)$$

$$z_{t+1} = \eta z_t + \varepsilon_{t+1}. \quad (13)$$

このモデルを解く、ということを考えてみる。経済成長モデルでは、市場均衡を満たす消費と資本の水準は、鞍点に収束する一本の曲線で描かれていた。すなわち、ある時点での資本水準が与えられた場合、それに対応する消費水準は、Saddle Path 上の一点で示される。数式で書くと

$$c_t = h(k_t), \quad (14)$$

⁷近年、期待効用最大化という形式では、消費者の行動をうまく描写できないと主張する経済学者が増加している。Behavioral Economics と呼ばれる分野であり、現在かなり精力的に分析がなされている。Robert Shiller や Alan Blinder などの著名なマクロ・金融の専門家も近年様々な研究を行っている。代表的なものは、セイラー (Thaler)[1998] の『市場と感情の経済学』ダイヤモンド社 (篠原勝訳) であろう。

⁸余談であるが、マクロ経済学の議論で『合理的期待』の定義に関して、混乱している記述を時に見受けられる。筆者の理解している限りでは、標準的な定義は以下の通りである。ある経済モデルにおいて、消費者がある変数に関して合理的期待をもつ、ということは、その消費者がモデルの構造を認識し、そのモデルから導かれる当該変数の条件付期待値をその将来予想と一致させるときである。したがって合理的期待という概念は、モデルごとに定義されるべきものなのである。

という関数で Saddle Path が定義された。この関係は、Policy Function と呼ばれる。資本ストックは jump できない変数であり、State Variable、または Predetermined Variable と呼ばれる。t 期において変更することが出来ないという意味である。それに対し、消費は t 期で自由に設定することができる。そのような変数のことを Control Variable、または Non-Predetermined Variable と呼ばれる。Predetermined Variable に依存して Control Variable の水準を決定する式を Policy Function と定義するのである。

我々の単純な RBC モデルでは、State Variable は資本 k_t と技術水準 z_t である⁹。なぜなら、t 期において、この経済の代表的個人は両変数を動かすことが出来ないためである。一方、Control Variable は消費 c_t と労働供給 l_t である。経済成長モデルとのアナロジーに従えば、我々のモデルの解は、以下のような形になることが予想される。

$$c_t = h_1(k_t, z_t) \quad (15)$$

$$l_t = h_2(k_t, z_t) \quad (16)$$

ここで問題になるのは、そのような解が存在するか否か、存在するならば、どのようにすればそれを導くことができるか、である。前者の問題は深刻な問題であるが、ここでのモデルに関しては、最適化の解が存在することが知られている。より一般的なモデルで解の存在を保証させることは難しいが、ここではその問題には深く立ち入らず¹⁰、解が存在すると仮定し、上記のような 2 つの Policy Function を導く手法を考察する。最もナイーブな方法は、財政学や国際経済学などの応用ミクロ経済分析で行われるように、一般均衡を定義する最適化の一階条件と市場均衡条件を全て並べ¹¹、連立方程式体系にし、その根を求めることである。あるいは、より洗練された手法で、Scarf Algorithm 等を用いることも考えることは可能である。しかし、ここでのモデルにおいて上記の手法を適用することは非常に困難である。それは、この経済は無限期間であり、均衡を定義する連立方程式は無次元次元になってしまうためである。したがって、我々は別の手法を探さねばならない。

近年のマクロ経済学の進展は、如何にして上記の問題や、さらに複雑な動学最適化問題を実際に解いていくか、その解法の進展と密接な関係がある。Closed Form で Policy Function を求めることができない以上、なんらかの近似を用いて解くことになる。解法には大きく分けて (1) 離散近似、またはスプライ補間によるノンパラメトリック法と (2) 線形、または多項式によるパラメトリック法に分けることが出来る。ここでは、数ある手法のうち、もっとも単純で、なおかつ、諸変数がスムーズに動く経済モデルでは広く適用可能な線形近似法を用いる。

⁹研究者の中には内生変数のみを State Variables と呼び、ショック項は外生変数として区別する者もいる。

¹⁰詳しくは Stokey and Lucas [1989], *Recursive Methods in Economic Dynamics*, Harvard University Press が参照せよ。

¹¹無論、ワルラス法則があるため、一本は必要なくなる。

5 線形近似手法 (Linear-Quadratic Methods)

この手法はもともと Blanchard and Kahn[1980] により紹介されたものであり、King, Plosser, and Rebelo [1988a, b] がさらに詳細に紹介したため、Blachard-Kahn 法あるいは KPR 法とも呼ばれる。基本的なアイデアは、Policy Functions が Predetermined Variables に関して線形である、と仮定し、線形関数の中で、もっともらしいものを選ぶのである。具体的には、定常状態において経済システムを線形近似することで Saddle Path が線形になることを保証し、その上で、Saddle Path を導く。この手法は、最適成長モデルで Saddle Path を線形近似してもとめる手法と同一であるが、この経済には不確実性が存在しており、将来の不確実性を考慮して代表的個人が行動を決定するところが決定的に異なっている。

まず、上記の基本モデルを Random Lagrange Methods を用いて一階条件を求める。ラグランジュアンを次のように作る。

$$L = E_0 \left[\sum_{t=0}^{\infty} \beta^t u(c_t, 1 - l_t) + \beta^t \lambda_t (e^{z_t} F(k_t, l_t) + (1 - \delta) k_t - c_t - k_{t+1}) \right]. \quad (17)$$

これを t 期における情報を用いて、 c_t 、 l_t 、 k_{t+1} について微分する。

$$E_t \left[\frac{-\partial}{\partial c_t} u(c_t, 1 - l_t) - \lambda_t \right] = 0, \quad (18)$$

$$E_t \left[\frac{\partial}{\partial l_t} u(c_t, 1 - l_t) + \lambda_t e^{z_t} \frac{\partial}{\partial l_t} F(k_t, l_t) \right] = 0, \quad (19)$$

$$E_t \left[-\lambda_t + \beta \lambda_{t+1} \left(e^{z_{t+1}} \frac{\partial}{\partial k_{t+1}} F(k_{t+1}, l_{t+1}) + (1 - \delta) \right) \right] = 0. \quad (20)$$

ところで、最初の 2 つの式では、条件付期待値オペレーターの中には t 期で決定される変数しか存在しない。したがって、それらは t 期において不確実性は存在せず、条件付期待値を外すことができる。しかし、(20) の中には、 t 期においては確定していない変数が入っており、条件付期待値を外すことはできない。ただ、 λ_t は t 期において確定しており、それとコンスタントの β のみ期待値オペレーターから外すことが出来る。したがって、以下のように書き直すことができる。

$$\frac{\partial}{\partial c_t} u(c_t, 1 - l_t) = \lambda_t, \quad (21)$$

$$-\frac{\partial}{\partial l_t} u(c_t, 1 - l_t) = \lambda_t e^{z_t} \frac{\partial}{\partial l_t} F(k_t, l_t), \quad (22)$$

$$\lambda_t = \beta E_t \left[\lambda_{t+1} \left(e^{z_{t+1}} \frac{\partial}{\partial k_{t+1}} F(k_{t+1}, l_{t+1}) - \delta \right) \right]. \quad (23)$$

λ_{t+1} は、 t 期においては確率変数であり、それゆえに Random Multiplier と呼ばれる。最初の 2 つの式は、以下のように限界代替率で表すことが出来る。

$$\frac{-\frac{\partial}{\partial l_t} u(c_t, 1 - l_t)}{\frac{\partial}{\partial c_t} u(c_t, 1 - l_t)} = e^{z_t} \frac{\partial}{\partial l_t} F(k_t, l_t). \quad (24)$$

この経済では、生産物は1種類であり、その価格が1になっている。上式の左辺は消費と余暇の限界代替率であり、右辺は労働の限界生産性、市場均衡においては賃金に等しい。

動学最適化問題の解を特定するには、さらに、境界条件が必要である。最適成長とのアナロジーを用いれば、以下のような横断面の条件を課すことになる。

$$\lim_{t \rightarrow \infty} E_o [\beta^t \lambda_t k_t] = 0. \quad (25)$$

横断面の条件は、最適化の過程で生じるものであり、本来外生的に与えるものではない。無限期間で、かつ不確実性がある場合、どのような横断面の条件を課すか、一般的な公式は今のところ、便利な形では存在しないが、上記の横断面の条件と他の最適化条件を満たす path が存在すれば、それは最適化問題の解になっていることを証明することは可能である。すなわち、上記の条件は十分条件として機能するのである¹²。実際の作業では、さらに厳しい

$$\lim_{t \rightarrow \infty} E_o [\beta^t k_t] = 0, \quad (26)$$

の条件を課すことが多い。これは横断面条件の十分条件になっており、この条件を満たし、かつ他の最適化条件を同時に満たすものがあれば、それは実際の最適化問題の解となっている。

6 カリブレーション

ここまでのところ、効用関数と生産関数には特殊な仮定をおかずに議論を進めてきたが、以降の数式の変形を行う際には、関数形を特定化するほうが便利である。そこで、この節では、カリブレーションと呼ばれる手法により、関数形やパラメータの値を特定化する。カリブレーションが、実際にはどのようなプロセスのことを指すのかは、必ずしも統一された見解があるわけではないが、ここでは、基本的には Cooley ed.[1995] に従って解説する¹³。モデルを特定化するということは、モデルに制約を課すことに等しい。カリブレーションとは、もともと目盛りをつける、または正しい価値を決定する、という意味である。動学一般均衡分析においては、以下の作業のことを指す。

(1) 探すパラメータの取りうる値を制限する。これには、経済理論とデータをつき合わせる必要がある。例えば、投資と資本の比率が長期的に0.1であれば、減価償却率 δ を0.1に設定するのである。しかし、どのようにパラメータの値を設定する手続きには様々なものがあり、ときには他の実証研究の結果を適用することもある。なお、近年では、モデルを直接推計することでパラメータを得ることもある。これは構造モデルの推計という一大分野となりつつあり、GMM や ML

¹²詳しくは、Stokey, Lucas, and Prescott [1989], *Recursive Methods in Economic Dynamics*, Harvard University Press. を参照せよ。

¹³初期の RBC の文献においてカリブレーションという言葉は計量経済学的手法を採用せずに独自の手法を用いる、というニュアンスを多分に含んでいる。しかし、計量的手法はかならずしも t-検定や F-検定に限定される必要は無く、統計的手法を用いてモデルの評価を行うことと考えれば、特にカリブレーションと計量分析を区別する必要は無いと思える。

を用いて一階条件式を推定する手法や、境界条件も使い、Simulation 法により推定する手法など、近年最も進歩の大きな分野である。

(2) 後にモデルを評価する際に用いるデータを設定する。(1)においてデータを用いているので、あるデータとモデルの結果は恒等的に一致する。たとえば、投資と資本の比率から δ の値を求めた場合、モデルの評価に、 δ が投資・資本比率に等しいかどうかを用いても意味がないのである。したがって、そのような恒等関係にない指標を設定する必要がある。また、モデルの目標に沿った評価基準を設定する必要がある。例えば、失業が存在しないモデルにおいて、失業率の値を評価の指標に用いても意味のある結果を得ることはできないということである。初期のRBCでは、消費・投資と総生産の間の共分散が用いられた。

(3) (1) で求められたパラメーターの値をモデルに入れて解き、(2) で与えられた指標をモデルの予測値と比較する。

では、Cooley ed.[1995] に従い、先のモデルに関数構造とパラメーターを組み込んでみる¹⁴。

まず、所得、資本、労働の分配を見ると、各々の分配率は大きく変化してはいない。これは、労働分配率が年によらず一定の生産関数を用いて構わないことを示唆する。分配率が生産水準に寄らず一定の生産関数とは、コブ・ダグラス型である。すなわち

$$Y_t = e^{z_t} A K_t^\theta L_t^{1-\theta}. \quad (27)$$

次に、余暇消費時間はほとんど一定であり、実質賃金は一定の率で上昇している。一人当たり消費と実質賃金がほぼ一定の率で成長していることも考慮すると、これは消費と余暇の代替の弾力性が1であることを示唆する。すなわち、瞬時的効用関数もコブ・ダグラス型である。

$$u(c_t, 1 - l_t) = \frac{(c_t^{1-\alpha} (1 - l_t)^\alpha)^{1-\sigma} - 1}{1 - \sigma}. \quad (28)$$

ここで、 $1/\sigma$ は異時点間の弾力性であり、この推定は非常に困難であることが知られている。なぜなら、 σ の水準は均斉成長経路自体には影響を与えず、そこへの移行過程にのみ影響をあたえるためである。ここでは、単純なケースとして、 $\sigma = 1$ 、すなわち対数効用のケースのみを考えることにする¹⁵。

$$u(c_t, 1 - l_t) = (1 - \alpha) \ln c_t + \alpha \ln (1 - l_t). \quad (29)$$

ここまでの作業で関数形は特定できたことになり、残るはパラメーターの設定である。長期成長率を外生 γ と考え、上記の [基本モデル] を書き直すと、

$$\text{Max } E_0 \left[\sum_{t=0}^{\infty} \beta^t ((1 - \alpha) \ln c_t + \alpha \ln (1 - l_t)) \right], \quad (30)$$

¹⁴なお、1990年代初頭のアメリカ経済を念頭に置いているので、日本経済を念頭に置く場合は、また異なるカリブレーションが必要になると思われるので注意されたい。

¹⁵無論、この仮定にはなんの根拠も無いが、実際、 σ の様々な手法による推定値には幅が大きく、どの値を採用しても問題が残る。様々な σ の値に関して simulation を行うことが望ましいと思われる。

$$\text{s.t. } (1 + \gamma) k_{t+1} = e^{z_t} A k_t^\theta l_t^{1-\theta} + (1 - \delta) k_t - c_t, \text{ for all } t, \quad k_0 > 0: \text{ given}, \quad (31)$$

$$z_{t+1} = \eta z_t + \varepsilon_{t+1}. \quad (32)$$

ただし、成長理論の時に学んだように、資本と消費を経済成長因子 $(1 + \gamma)^t$ で割っていることに注意せよ。

まず、生産関数の資本弾力性 θ の値を考える。これは、良く知られているように、分配面からみた場合の、国民所得における資本分配率に等しくなる。Cooley ed. [1995] は、この値を 0.40 と試算している。

次に、均斉成長経路のデータと、このモデルの生み出す均斉成長経路の予測値を比較し、他のパラメーターの設定を行う。オイラー方程式は以下ようになる。

$$E_t \left[-\lambda_t + \beta \lambda_{t+1} (1 + \gamma)^{-1} \left(e^{z_{t+1}} \frac{\theta A k_{t+1}^\theta l_{t+1}^{1-\theta}}{k_{t+1}} + (1 - \delta) \right) \right] = 0. \quad (33)$$

均斉成長経路では、 $z_t = 0$ for all t であり、不確実性は存在せず、また各変数が一定になるため、上式は

$$\frac{\theta y}{k} + (1 - \delta) = \frac{1 + \gamma}{\beta}. \quad (34)$$

次に、余暇と消費の限界代替率が賃金に等しかったため、均斉成長経路では、以下の関係を導くことが出来る。

$$(1 - \theta) \frac{y}{c} = \frac{\alpha}{1 - \alpha} \frac{l}{1 - l}. \quad (35)$$

最後に、資源制約より、均斉成長経路上では、

$$(1 + \gamma) \frac{k}{y} = (1 - \delta) \frac{k}{y} + \frac{i}{y}. \quad (36)$$

ただし、

$$i = (\delta + \gamma) k, \quad (37)$$

であり、投資を意味する。長期の投資・資本比率は、公表値に従うと 0.076 であるから、経済成長率 γ が年間 2.8% とすれば減価償却率 $\delta = 0.048$ であり、四半期では 0.012 になる。 θ, δ が特定化できれば、割引因子 β も求めることができ、 $\beta = 0.947$, 四半期では 0.987 になる。次に、家計の余暇・消費選択に関してであるが、Becker 等による家計行動の分析によると、家計は睡眠などのやむをえない時間を除いた、discretionary time の 1/3 を市場活動におこなう。ここでは、家計は 0.31 の時間を労働に当てるとする。すると、(35) より、 y/c がおよそ 1.33 であることを利用すると、 $\alpha/(1 - \alpha) = 1.78$ を得ることが出来る。

最後に、Solow Residuals, z_t であるが、これまでの特定化によって、GDP, K, L のデータから計算することができる。具体的には

$$z_t - z_{t-1} = (\ln Y_t - \ln Y_{t-1}) - \theta (\ln K_t - \ln K_{t-1}) - (1 - \theta) (\ln l_t - \ln l_{t-1}), \quad (38)$$

である。これから、 z_t の自己相関係数 η を計算すると、非常に高い相関がある。Cooley に従い、ここでは $\eta = 0.95$ とする。また、 ε_t の標準偏差も同様にして計算することが可能であり、 $\sigma_\varepsilon = 0.007$ とする。

以上の作業により、ここでのモデルの関数形とパラメータはすべて特定化し終わったことになり、具体的に数値計算することが可能となった¹⁶。パラメータを整理すると、以下ようになる。

θ	δ	η	σ_ε	γ	β	σ	α
0.40	0.012	0.95	0.007	0.026	0.987	1	0.64

7 (対数) 線形近似による解法

オイラー方程式と資源制約を、前節で特定した関数形を用いて書き直すと、以下ようになる。

$$(1 - \theta) \frac{e^{z_t} A k_t^\theta l_t^{1-\theta}}{c_t} = \frac{\alpha}{1 - \alpha} \frac{l_t}{1 - l_t}, \quad (39)$$

$$\frac{(1 - \alpha)}{c_t} = \lambda_t, \quad (40)$$

$$(1 + \gamma) k_{t+1} = e^{z_t} A k_t^\theta l_t^{1-\theta} + (1 - \delta) k_t - c_t, \quad (41)$$

$$\lambda_t = \beta E_t \left[\lambda_{t+1} (1 + \gamma)^{-1} \left(e^{z_{t+1}} \frac{\theta A k_{t+1}^\theta l_{t+1}^{1-\theta}}{k_{t+1}} + (1 - \delta) \right) \right], \quad (42)$$

$$z_{t+1} = \eta z_t + \varepsilon_{t+1}. \quad (43)$$

Policy Functions を線形のクラスの中から探すには、いくつかの方法がある。一つは、Linear Quadratic 手法といい、目的関数を二次関数で、制約式を線形でそれぞれ均斉成長経路上で近似する手法である。もう一つの手法は、上記の一連の均衡条件を均斉成長経路上で線形近似する手法である。実は、両者は同値であることがわかっている。また、Random Multiplier を用いず、Dynamic Programing の形に問題を書き直し、目的関数を二次関数で、制約式を線形で近似し、Value Function、ないし Policy Functions を直接計算する手法もある。この、Dynamic Programing を用いる手法は広い応用可能性を持っており、今日では微分不可能な経済モデルにも応用されている。しかし、かなり技術的な説明が必要になる。

¹⁶なお、生産関数の中の A 項が特定されていないが、我々の分析では A の水準は解に影響を与えない。これは、コブ・ダグラスなどの特殊な仮定によるものであり、一般的には A の水準を決めねばならない。

ここでは、Blanchard and Kahn[1980]以降、長い伝統を持つ、均衡条件式を線形近似する手法を採用する。この手法は、経済モデルが微分可能である限り適用可能であり、かつコンピューターに課す負担がスピード、メモリーいずれの点でも小さく、大きなモデル(方程式の数が300を超えても)であっても、現在のPCならば1分もかからずに計算を終えることが可能である。

まず、上記のシステムを均斉成長経路上で $(c_t, k_t, l_t, \lambda_t, z_t, \varepsilon_t) = (c, k, l, \lambda, 0, 0)$ for all t で線形近似する。線形近似は、テイラー展開を行うわけであるが、上記のようなコブ・ダグラス型のモデルでは、対数変換をしてから線形近似するほうが後の問題が容易になることが多い。そこで、まず対数線形近似について簡単に説明する。

一般に、以下を満たす連続微分可能な関数があるとする。

$$g(y) = f(x), x \in R. \quad (44)$$

この式を $(x, y) = (\bar{x}, \bar{y})$ で線形近似すると、単純なテイラー展開により

$$g(\bar{y}) + \frac{dg}{dy}(\bar{y})(y - \bar{y}) = f(\bar{x}) + \frac{df}{dx}(\bar{x})(x - \bar{x}). \quad (45)$$

対数線形近似を行う場合は、以下の恒等式を利用する。

$$x = e^{\ln x} \quad (46)$$

そして、新たに変数を定義し

$$h = \ln x, \quad (47)$$

$$j = \ln y, \quad (48)$$

$y = f(x)$ を書き直すと

$$g(e^j) = f(e^h). \quad (49)$$

これを j, h に関してテイラー展開を行う。すると

$$g(e^{\bar{j}}) + e^{\bar{j}} \frac{dg}{dy}(e^{\bar{j}})(j - \bar{j}) = f(e^{\bar{h}}) + \frac{df}{dx}(e^{\bar{h}}) e^{\bar{h}}(h - \bar{h}). \quad (50)$$

j, h を y, x に戻すと

$$g(\bar{y}) + \bar{y} \frac{dg}{dy}(\bar{y})(\ln y - \ln \bar{y}) = f(\bar{x}) + \bar{x} \frac{df}{dx}(\bar{x})(\ln x - \ln \bar{x}). \quad (51)$$

これを元の(45)と比較すると、両辺の微分係数に、 \bar{y} ないし、 \bar{x} が乗じられていることのみが異なる。

$$dy = \ln y - \ln \bar{y}, \quad dx = \ln x - \ln \bar{x}, \quad (52)$$

と定義し、 $g(\bar{y}) = f(\bar{x})$ が成立しているとする、対数近似式は以下のように書くことが可能である。

$$\bar{y} \frac{dy}{dy} (\bar{y}) dy = \bar{x} \frac{df}{dx} (\bar{x}) dx. \quad (53)$$

例えば、コブ・ダグラス型の生産関数が以下のように与えられたとする。

$$Y = AK^\theta L^{1-\theta}. \quad (54)$$

この式を $\bar{Y} = \bar{AK}^\theta \bar{L}^{1-\theta}$ で対数線形近似する場合は、

$$\bar{Y} (dY) = \bar{AK}^\theta \bar{L}^{1-\theta} dA + \theta \bar{AK}^\theta \bar{L}^{1-\theta} dK + (1-\theta) dL. \quad (55)$$

しかし、さらに整理することが可能であり、

$$dY = dA + \theta dK + (1-\theta) dL. \quad (56)$$

であり、非常に単純になることがわかる。

(39) – (43) を均斉成長経路上で対数線形近似する。ただし、 z_t は、すでに対数の形になっているので、 z_t のみはそのまま線形近似することにする。すると、以下の式を得ることができる。

$$dz_t + \theta dk_t + (1-\theta) dl_t - dc_t = \frac{1}{1-l} dl_t, \quad (57)$$

$$-dc_t = d\lambda_t, \quad (58)$$

$$d\lambda_t = E_t d\lambda_{t+1} + \mu E_t dz_{t+1} + \mu(\theta-1) E_t dk_{t+1} + \mu(1-\theta) E_t dl_{t+1}, \quad (59)$$

$$(1+\gamma) \frac{k}{y} dk_{t+1} = dz_t + \theta dk_t + (1-\theta) dl_t + (1-\delta) \frac{k}{y} dk_t - \frac{c}{y} dc_t, \quad (60)$$

$$dz_{t+1} = \eta dz_t + d\varepsilon_{t+1}. \quad (61)$$

ただし、

$$\mu = \frac{\theta\beta y}{(1+\gamma)k}, \quad (62)$$

$$y = Ak^\theta l^{1-\theta}, \quad (63)$$

なお、前節までのカリブレーションにより、上記の線形差分方程式のパラメータは数値的に解くことが可能である。具体的には、均斉成長系路上の均衡方程式である、

$$\frac{\theta y}{k} + (1-\delta) = \frac{1+\gamma}{\beta}, \quad (64)$$

$$(1-\theta) \frac{y}{c} = \frac{\alpha}{1-\alpha} \frac{l}{1-l}, \quad (65)$$

$$(\gamma + \delta) \frac{k}{y} = 1 - \frac{c}{y}, \quad (66)$$

$$y = k^\theta l^{1-\theta}, \quad (67)$$

の連立方程式を解くことで得ることが出来る。この場合は、数値計算に頼らずに手で解くことができ、

$$\frac{y}{k} = \frac{1}{\theta} \left[\frac{1+\gamma}{\beta} - (1-\delta) \right], \quad (68)$$

$$\frac{c}{y} = 1 - (\gamma + \delta) \frac{k}{y}, \quad (69)$$

$$l = \frac{\frac{1-\alpha}{\alpha} (1-\theta) \frac{y}{c}}{\left[1 + \frac{1-\alpha}{\alpha} (1-\theta) \frac{y}{c} \right]}, \quad (70)$$

である。しかし、多少複雑なシステムになると、上記のように解析的にパラメータを解くことができるのはきわめて稀になる。解析的に解くことが出来ない場合は、Root Finding をコンピューターに行わせる必要がある。Matlab であればコマンド `fzero` が、方程式の解を与える¹⁷。

次に、(57)-(61) で与えられた線形の差分方程式システムの解を具体的に導出する。我々の目標は、線形な Policy Functions の導出であった。すなわち、目標となるのは、

$$dc_t = C_1 dk_t + C_2 dz_t, \quad (71)$$

$$dl_t = C_3 dk_t + C_4 dz_t, \quad (72)$$

の形状の関数である。今、 dc_t に関する Policy Function が手に入ったとしよう。すると、(57) から直ちに dl_t に関する Policy Function も計算できる。さらに、(58) から、 $d\lambda_t$ に関する Policy Function も計算可能である。すなわち、消費と労働供給いずれかの Policy Function か、乗数に関する Policy Function を入手できれば、他の Policy Function は直ちに計算することが出来る。消費、労働、乗数のどれを先に計算しても良いことになる。Blanchard and Kahn[1980] は乗数を消去し、残りの Control Variable のどちらかを選択している。Burnside[1999] や King, Plosser, and Rebelo [1988a, b] では、乗数のみを残している。いずれの方法でも同じ結果を得ることが出来るが、後者の方が、複雑なシステムでは手作業が減少するメリットがある。そのため、ここでは乗数のみを残す手法を解説する。

あらかじめ作業の道筋を解説すると、以下のようになる。

¹⁷非線形方程式の解を求める手法には様々なものがあり、今日でも進歩が続いている一大分野でもある。計量経済学において最尤法 (Maximum Likelihood Methods) を実践するときにも、同様の問題に直面する。中級・上級レベルの計量経済学のテキストには、大抵、一連の手法の詳しい解説が載っている。なお、`fzero` は非常に単純な手法しか含んでおらず、複雑な非線形方程式の解を計算するには限界がある。Matlab には別売りで、様々な Root Finding を行う ToolBox が販売されている。

- (1) Control Variables を乗数と State Variables, Shocks の関数の形に書き換える。
- (2) 乗数と State Variables, Shocks 項に関する連立差分方程式を作る。
- (3) Jordan の標準形を用いて、発散する根を消去する。
- (4) 乗数に関する Policy Function を得る。
- (5) (1) で求めた関数を用い、Control Variables に関する Policy Function を得る。

では、まず (1) から始めてみる。(57) と (58) を変形し

$$\begin{pmatrix} 1 & \frac{1}{1-l} & -1+\theta \\ -1 & & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} dc_t \\ dl_t \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \theta & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} dk_t \\ d\lambda_t \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} dz_t. \quad (73)$$

次に、(59) と (60) を変形し、

$$\begin{aligned} & \begin{pmatrix} -\mu(1-\theta) & 1 \\ -(1+\gamma)\frac{k}{y} & 0 \end{pmatrix} E_t \begin{pmatrix} dk_{t+1} \\ d\lambda_{t+1} \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} 0 & -1 \\ \theta + (1-\delta)\frac{k}{y} & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} dk_t \\ d\lambda_t \end{pmatrix} = \\ & \begin{pmatrix} 0 & -\mu(1-\theta) \\ 0 & 0 \end{pmatrix} E_t \begin{pmatrix} dc_{t+1} \\ dl_{t+1} \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ c/y & -(1-\theta) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} dc_t \\ dl_t \end{pmatrix} + \\ & \begin{pmatrix} -\mu \\ 0 \end{pmatrix} E_t dz_{t+1} + \begin{pmatrix} 0 \\ -1 \end{pmatrix} dz_t. \end{aligned} \quad (74)$$

上の 2 式を以下のように書くことにする。

$$M_{cc}V_t = M_{cs}X_t + M_{ce}z_t, \quad (75)$$

$$M_{ss0}E_tX_{t+1} + M_{ss1}X_t = M_{sc0}E_tV_{t+1} + M_{sc1}V_t + M_{se0}E_tz_{t+1} + M_{se1}z_t, \quad (76)$$

ただし、 $V_t = (c_t, l_t)'$ 、 $X_t = (k_t, \lambda_t)'$ である。

なお、以降の手法は、上記のモデルのみでなく、諸変数がスムーズに動く一般の動学均衡分析を解く際に適用可能なものであり、極力一般的なケースを考慮して説明する。状態変数や Control Variables がたとえ数百あっても、上記の 2 本の式の形状に変更可能である限り、応用可能である。

M_{cc} に逆行列 M_{cc}^{-1} が存在すると仮定すると¹⁸、両式をまとめることが可能であり、

$$V_t = M_{cc}^{-1}M_{cs}X_t + M_{cc}^{-1}M_{ce}z_t, \quad (77)$$

$$\begin{aligned} M_{ss0}E_tX_{t+1} + M_{ss1}X_t &= M_{sc0}E_t(M_{cc}^{-1}M_{cs}X_{t+1} + M_{cc}^{-1}M_{ce}z_{t+1}) + \\ &M_{sc1}(M_{cc}^{-1}M_{cs}X_t + M_{cc}^{-1}M_{ce}z_t) + M_{se0}E_tz_{t+1} + M_{se1}z_t, \end{aligned} \quad (78)$$

¹⁸ M_{cc} に逆行列が存在しない場合、ここでの手法を適用することはできない。Control Variables の線形結合をつくり新たに変数を定義しなおし M_{cc} を正則にすることが可能であるが、非常に複雑な作業であり、この手法の限界であると言える。

整理すると

$$E_t X_{t+1} = W X_t + R E_t z_{t+1} + Q z_t \quad (79)$$

ただし、

$$W = - (M_{ss0} - M_{sc0} M_{cc}^{-1} M_{ce})^{-1} (M_{ss1} - M_{sc1} M_{cc}^{-1} M_{cs}), \quad (80)$$

$$R = (M_{ss0} - M_{sc0} M_{cc}^{-1} M_{ce})^{-1} (M_{se0} + M_{sc0} M_{cc}^{-1} M_{ce}), \quad (81)$$

$$Q = (M_{ss0} - M_{sc0} M_{cc}^{-1} M_{ce})^{-1} (M_{se1} + M_{sc1} M_{cc}^{-1} M_{ce}), \quad (82)$$

以上で、Predetermined Variables と乗数に関する連立差分方程式を得ることが出来た。次に、Step (3) として、Jordan の標準形を用いて W を対角化すると、

$$P^{-1} X_{t+1} = \Lambda P^{-1} X_t + P^{-1} R Z_{t+1} + P^{-1} Q Z_t, \quad (83)$$

ただし、 Λ は W の固有値を対角成分にもつ対角行列であり、P は固有ベクトルからなる行列であり、以下の式をみたとす。

$$P \Lambda P^{-1} = W. \quad (84)$$

直交化された新たな変数を以下のように定義する。

$$\begin{pmatrix} \tilde{x}_t \\ \tilde{\lambda}_t \end{pmatrix} = P^{-1} X_t. \quad (85)$$

ここでは Predetermined Variables が資本の一つしかないため \tilde{x}_t は 1 次元ベクトルになっているが、より高次元の経済モデルでは、Predetermined Variables、または State Variables の次元に等しいベクトルとなる。

最適成長モデルの際と同様に、 Λ の発散根を消去し、収束していく経路のみを考えていく。差分方程式においては固有値の絶対値が 1 よりも大きいときは発散根、1 よりも小さいときは収束根であった。操作が楽になるように、 Λ の固有値を、絶対値が小さい順にならべかえ、対応する行列 P もまた並べ替える。そして

$$\Lambda = \begin{pmatrix} \Lambda_1 & 0 \\ 0 & \Lambda_2 \end{pmatrix}, \quad (86)$$

Λ_1 は、対角成分の絶対値が 1 よりも小さく、 Λ_2 は絶対値が 1 よりも大きい対角行列である。ここで扱っているモデルでは、制約条件が凸であり、目的関数が凹になっているので、解はただ一つ常に存在するため、2 つの固有値の絶対値のいずれかは 1 よりも大きく、もうひとつは 1 よりも小さくなっている。しかし、外部性や公共財、収穫逓増等を含むモデルでは、一般に、 Λ_1 の次元が Predetermined Variables の次元に等しくなるとは限らない。もしも、 Λ_1 の次元のほうが Predetermined Variables の次元よりも大きい場合、この経済には収束解が連続的に存在し、モデルの解は一つに決まらない。このような現象を indeterminacy と呼ぶ。indeterminacy が発生している場合、均衡が非常に不安定になる可能性もあり、サンスポット均衡と呼ばれる現象が発生するかもしれない。逆に、 Λ_1 の次元が Predetermined Variables の次元よりも大きい場合、収束経路は存在せず、定常状態に収束する均

衡が存在しない状況にある。ここでは、定常状態に収束する均衡が一意に決定される状況のみを考える。

W と P, R, Q を、それぞれ Λ_1 の次元に対応するように分割する。ここでは、単に 4 つに分割するだけである。

$$W = \begin{pmatrix} W_{11} & W_{12} \\ W_{21} & W_{22} \end{pmatrix}, R = \begin{pmatrix} R_x \\ R_\lambda \end{pmatrix}, \quad (87)$$

$$Q = \begin{pmatrix} Q_x \\ Q_\lambda \end{pmatrix}, P = \begin{pmatrix} P_{11} & P_{12} \\ P_{21} & P_{22} \end{pmatrix}, \quad (88)$$

$$P^{-1} = \begin{pmatrix} P^{11} & P^{12} \\ P^{21} & P^{22} \end{pmatrix}. \quad (89)$$

すると、以下の関係があることが容易に確認できる。

$$\begin{pmatrix} W_{11} & W_{12} \\ W_{21} & W_{22} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} P_{11}\Lambda_1 P^{11} + P_{12}\Lambda_2 P^{21} & P_{11}\Lambda_1 P^{12} + P_{12}\Lambda_2 P^{22} \\ P_{21}\Lambda_1 P^{11} + P_{22}\Lambda_2 P^{21} & P_{21}\Lambda_1 P^{12} + P_{22}\Lambda_2 P^{22} \end{pmatrix}. \quad (90)$$

以上の行列の分解を用いると、(83) の第一式は、以下のように書くことが出来る。

$$E_t \tilde{x}_{t+1} = \Lambda_1 \tilde{x}_t + (P^{11}R_x + P^{12}R_\lambda) E_t z_{t+1} + (P^{11}Q_x + P^{12}Q_\lambda) z_t. \quad (91)$$

上の式は、来期の $E_t \tilde{x}_{t+1}$ が、今期の \tilde{x}_t とショック項のみに依存していることを示しており、Policy Function に近い形状になっている。一方、第二式は

$$E_t \tilde{\lambda}_{t+1} = \Lambda_2 \tilde{\lambda}_t + (P^{21}R_x + P^{22}R_\lambda) E_t z_{t+1} + (P^{21}Q_x + P^{22}Q_\lambda) z_t, \quad (92)$$

になっている。ここで、 Λ_2 の対角成分の絶対値が 1 より大きいため（そのように Λ_2 を定義したため）、 $\tilde{\lambda}_t$ は発散する経路であることがわかる。そこで、その発散経路を消去するために、上の式を Forward に解くことにする。ここで、Forward に解く、というのは、以下の作業を指す。

$$\tilde{\lambda}_t = \Lambda_2^{-1} E_t \tilde{\lambda}_{t+1} - \Lambda_2^{-1} [(P^{21}R_x + P^{22}R_\lambda) E_t z_{t+1} + (P^{21}Q_x + P^{22}Q_\lambda) z_t], \quad (93)$$

$$\tilde{\lambda}_t = - \sum_{j=0}^{\infty} \Lambda_2^{-(j+1)} [(P^{21}R_x + P^{22}R_\lambda) E_t z_{t+1+j} + (P^{21}Q_x + P^{22}Q_\lambda) E_t z_{t+j}]. \quad (94)$$

この右辺は $\tilde{\lambda}_t$ が発散しないような水準であり、将来のショックに関する予測のみに依存している。なお、 Λ_2^{-1} の絶対値は 1 よりも小さいため、

$$\lim_{j \rightarrow \infty} (\Lambda_2^{-1})^j E_t \tilde{\lambda}_{t+j+1} = 0, \quad (95)$$

となることを利用している。

前節までのモデルのように、ショック項 z_t が AR1 に従っている場合、その期待値に依存している $\tilde{\lambda}_t$ は z_t の簡単な関数として書くことが可能であり、

$$z_{t+1} = \Pi z_t + \varepsilon_{t+1}, \quad (96)$$

$$E_t z_{t+1} = \Pi z_t, \quad (97)$$

ならば、

$$\tilde{\lambda}_t = \Psi z_t, \quad (98)$$

$$\Psi = - \sum_{j=0}^{\infty} \Lambda_2^{-(j+1)} [(P^{21} R_x + P^{22} R_\lambda) \Pi + (P^{21} Q_x + P^{22} Q_\lambda)] \Pi^j z_t. \quad (99)$$

次に、 $\tilde{\lambda}_t, \tilde{x}_t$ を、元の系列、 $X_t = (k_t, \lambda_t)$ に戻すと、

$$\lambda_t = - (P^{22})^{-1} P^{21} x_t + (P^{22})^{-1} \tilde{\lambda}_t. \quad (100)$$

ところで

$$x_{t+1} = W_{11} x_t + W_{12} \lambda_t + R_x E_t z_{t+1} + Q_x z_t, \quad (101)$$

であったから、

$$x_{t+1} = (P_{11} \Lambda_1 P^{11} + P_{12} \Lambda_2 P^{21}) x_t + (P_{11} \Lambda_1 P^{12} + P_{12} \Lambda_2 P^{22}) \lambda_t + R_x E_t z_{t+1} + Q_x z_t, \quad (102)$$

$$x_{t+1} = \left(P_{11} \Lambda_1 \left[P^{11} - P^{12} (P^{22})^{-1} P^{21} \right] \right) x_t + (P_{11} \Lambda_1 P^{12} + P_{12} \Lambda_2 P^{22}) (P^{22})^{-1} \tilde{\lambda}_t + R_x E_t z_{t+1} + Q_x z_t. \quad (103)$$

ここで、逆行列に関する公式を用いる。一般に、

$$\begin{pmatrix} E & F \\ G & H \end{pmatrix} \quad (104)$$

の逆行列は、以下のように書くことができる。

$$\begin{pmatrix} D^{-1} & -D^{-1} F H^{-1} \\ -H^{-1} G D^{-1} & H^{-1} + H^{-1} G D^{-1} F H^{-1} \end{pmatrix}, \quad (105)$$

$$D = E - F H^{-1} G. \quad (106)$$

これを利用すると、

$$x_{t+1} = (P_{11}\Lambda_1 P_{11}^{-1})x_t + (P_{11}\Lambda_1 P^{12} + P_{12}\Lambda_2 P^{22})(P^{22})^{-1}\tilde{\lambda}_t + R_x E_t z_{t+1} + Q_x z_t. \quad (107)$$

$\tilde{\lambda}_t = \Psi z_t$ であり、

$$x_{t+1} = (P_{11}\Lambda_1 P_{11}^{-1})x_t + (P_{11}\Lambda_1 P^{12} + P_{12}\Lambda_2 P^{22})(P^{22})^{-1}\Psi z_t + R_x E_t z_{t+1} + Q_x z_t, \quad (108)$$

$$x_{t+1} = (P_{11}\Lambda_1 P_{11}^{-1})x_t + \left[(P_{11}\Lambda_1 P^{12} + P_{12}\Lambda_2 P^{22})(P^{22})^{-1}\Psi + R_x \Pi + Q_x \right] z_t, \quad (109)$$

新たに係数を定義すると、

$$x_{t+1} = \Gamma_{xx} x_t + \Gamma_{xz} z_t. \quad (110)$$

λ_t に関しては、

$$\lambda_t = - (P^{22})^{-1} P^{21} x_t + (P^{22})^{-1} \Psi z_t, \quad (111)$$

もともとの Control Variables $V_t = (c_t, l_t)$ に戻すと、

$$V_t = M_{cc}^{-1} M_{cs} \left(- (P^{22})^{-1} P^{21} \right) x_t + \left[M_{cc}^{-1} M_{cs} \left(- (P^{22})^{-1} \Psi \right) + M_{cc}^{-1} M_{ce} \right] z_t, \quad (112)$$

新たに係数を定義すると、

$$V_t = \Gamma_{ux} x_t + \Gamma_{uz} z_t. \quad (113)$$

上記の式が Policy Functions になる。今期の消費と余暇は、今期の State Variables、すなわち資本水準と今期のショックおよび将来のショックに関する期待に関する線形の関数になっているのである。以上で、我々のモデルは解けたことになる。

8 Impulse Response Functions

前節で、我々はモデルの Policy Functions を導出した。本節ではその Policy Functions を用いて、シミュレーションを行う手法の一つ、Impulse Response Functions を説明する。これは時系列分析で広く採用されている手法であり、ある期にショックが生じた場合、そのショックが経済諸変数にどのような影響を与えていくか、時系列で追いかけるものである。例えば、今期、技術ショックが生じ、生産性が1%上昇したとする。この結果、今期以降の消費や投資、総生産にどのような影響が生じるかを Impulse Response は示すのである。Policy Functions が手元にある場合、この計算は非常にたやすい。

この経済のショック要因は $z_{t+1} = \Pi z_t + \varepsilon_{t+1}$ における ε_{t+1} である。 ε_{t+1} の変化が他の諸変数にどのような影響を与えるかを考察する。 z_t が変化したとき、Predetermined Variables がどのように変化するかは、以下の式で与えられていた。

$$x_{t+1} = \Gamma_{xx}x_t + \Gamma_{xz}z_t. \quad (114)$$

また、Predetermined Variables が変化したとき、Control Variables がどのように変化するかは、Policy Functions で与えられる。

$$W_t = \Gamma_{ux}x_t + \Gamma_{uz}z_t. \quad (115)$$

以下のように新たに変数を定義する。

$$s_t = \begin{pmatrix} x_t \\ z_t \end{pmatrix}. \quad (116)$$

すると、 s_t の変化は、以下の式であたえられる。

$$s_{t+1} = M s_t + \hat{\varepsilon}_{t+1}, \quad (117)$$

$$M = \begin{pmatrix} \Gamma_{zz} & \Gamma_{zz} \\ 0 & \Pi \end{pmatrix}, \quad \hat{\varepsilon}_t = \begin{pmatrix} 0 \\ \varepsilon_t \end{pmatrix}. \quad (118)$$

ε_t が、 $t+1$ 期に 1 になり、それ以外は全てゼロであるとする。すると、来期以降の Predetermined Variables の動きは、

$$s_{t+j} = M^j s_t + M^{j-1} \hat{\varepsilon}_{t+1}, \quad (119)$$

である。また、消費や余暇などの Control Variables は

$$V_{t+j} = (\Gamma_{ux}, \Gamma_{uz}) s_{t+j}, \quad (120)$$

で計算できる。以上の 2 式が Impulse Response Functions を作り出す。

9 Matlab Programs

本節では、前節までで説明したマクロモデルの Impulse-Response Functions を導出する Matlab プログラムを掲載する。プログラムは 2 つに分かれており、プログラム 1 はモデルの構造が格納されている The Main Program であり、プログラム 2 は、プログラム 1 で与えられた行列要素を元に、Policy Functions を計算するモジュールである。プログラム 2 は、モデルによらず一般的に利用可能である。なお、% で始まる各行は Matlab におけるコメント文である。

[プログラム 1] (The Main Program)

```

%
%
%
%
clear all;
format short;
%
% Parameter Values
%
delta = 0.012; % Depeciation (annual)
beta = 0.987;
gam = 0.026;
ehla = 0.95;
alpha = 0.64;
ceta = 0.40;
%
% Special Values for our model
%
%
yovk = (1/ceta)*((1+gam)/beta - (1-delta));
covy = 1-(gam+delta)*(1/yovk);
le = ((1-alpha)/alpha)*(1-ceta)*(1/covy)/(1+((1-alpha)/alpha)*(1-ceta)*(1/covy));
mhu = ceta*yovk*beta/(1+gam);
%
n=1; % The number of the predetermined variables
%
iter1=30; % The number of iteration for Impulse-Responses
%
%
%
% Matrices For subroutine to solve dynamic optimization problem
%
%
% MCC matrix
%
mcc=zeros(2,2);
mcc(1,1) = 1;
mcc(1,2) = 1/(1-le) -1 +ceta;
mcc(2,1) = -1;
%
%
% MSC Matrix
%
mcs = zeros(2,2);
mcs(1,1) = ceta;
mcs(2,2) = 1;

```

```

%
%
% MCE Matrix - no stochastic elements
%
mce = zeros(2,1);
mce(1,1) = 1;
%
%
% MSS0 Matrix
%
mss0 = zeros(2,2);
mss0(1,1) = -mhu*(1-ceta);
mss0(1,2) = 1;
mss0(2,1) = -(1+gam)/(yovk);
%
%
% MSS1 Matrix
%
mss1 = zeros(2,2);
mss1(1,2) = -1;
mss1(2,1) = ceta+(1-delta)*(1/yovk);
%
%
% MSC0 Matris
%
msc0 = zeros(2,2);
msc0(1,2) = -mhu*(1-ceta);
%
%
% MSC1 Matrix
%
msc1 = zeros(2,2);
msc1(2,1) = covy;
msc1(2,2) = -1+ceta;
%
%
% MSE0 Matrix
%
mse0 = zeros(2,1);
mse0(1,1) = -mhu;
%
%
% MSE1 Matrix
%
mse1 = zeros(2,1);
mse1(2,1) = -1;

```

```

%
%
% PAI Matrix
%
pai = zeros(1,1);
pai(1,1)= ehta;
%
%
%
[GXX,GXZ,GUX,GUZ,M,Psi,V] = burns6(n,mcc,mcs,mce,mss0,mss1,msc0,msc1,mse0,mse1,pai);
%
%
% Drawing the impulse and response function
%
%
TSE=zeros(2,1); % The state and shock variables
%
TSE(2,1)=1;
%
%
%
T =zeros(iter1,8); % Impulse Response Matrix
%
T(1,1) = 1; % The first period's index
%
%
N = M;
%
%
for k=1:iter1
    %
    %
    k1 = k;
    %
    TCC = GUX*TSE(1,1) + GUZ*TSE(2,1);
    %
    TY = (1-ceta)*TCC(2,1)+ceta*TSE(1,1) + TSE(2,1);
    %
    TW = TY - TCC(2,1);
    %
    TR = TY - TSE(1,1);
    %
    T(k,:)= [k1 TCC(1,1) TCC(2,1) TSE(1,1) TSE(2,1) TY TW TR];
    %
    TSE=M*TSE;
    %

```

```

        %
end;
%
%
% Plot the results
%
%
%
figure;
%
subplot(4,2,1)
plot(T(:,1),T(:,2))
title(' (1) Consumption')
xlabel('Year')
%
subplot(4,2,2)
plot((T(:,1)),T(:,3))
title(' (2) Employment')
xlabel('Year')
%
subplot(4,2,3)
plot((T(:,1)),T(:,4))
title(' (3) Capital')
xlabel('Year')
%
subplot(4,2,4)
plot((T(:,1)),T(:,6))
title(' (4) GDP')
xlabel('Year')
%
subplot(4,2,5)
plot((T(:,1)),T(:,7))
title(' (5) Wage')
xlabel('Year')
%
subplot(4,2,6)
plot((T(:,1)),T(:,8))
title(' (6) r')
xlabel('Year')
subplot(4,2,7)
plot((T(:,1)),T(:,5))
title(' (7) shock')
xlabel('Year')

%%%%%%%%%% The End of the Program %%%%%%%%%%

```

[プログラム 2]

```

function [GXX,GXZ,GUX,GUZ,M,Psi,V] = burns6(n,mcc,mcs,mce,mss0,mss1,msc0,msc1,mse0,mse1,pa
%
% n is the number of the predetermined variable.
%
%  $Mcc*ut = Mcs*(xt,ramt)'+Mce*zt,$ 
%  $Mss0*(xt+1, ramt+1)' + Mss1*(xt, ramt)' = Msc0*ut+1 + Msc1*ut+Mse0*zt+1$ 
+  $Mse1*zt,$ 
%  $zt+1 = Pai * zt + et.$ 
%
%
% Mss0 should be square.
%
% The outputs of this function are Gxx, Gxz, Gux, and Guz which are the
coefficients of
%
%  $xt+1 = Gxx*xt + Gxz *zt,$ 
%  $ut = Gux*xt + Guz *zt.$ 
%
% M is a transition matrix for both xt and zt.
% V is a diagonal matrix which shows the stability of the system.
% The number of the diagonal elements whose absolute values are
% smaller than one should be the same as the number of the state variables
% to get a unique solution.
%
%
Mss0 = mss0 - msc0*inv(mcc)*mcs;
Mss1 = mss1 - msc1*inv(mcc)*mcs;
Mse0 = mse0 + msc0*inv(mcc)*mce;
Mse1 = mse1 + msc1*inv(mcc)*mce;
%
W = -(Mss0)\Mss1;
R = (Mss0)\Mse0;
Q = (Mss0)\Mse1;
%
% This corresponds to  $(xt+1,ramt+1)'=W*(xt,ramt)'+Q*zt+1+R*zt;$ 
%
[PO,VO]=eig(W); % The eigensystem of this economy.
%
n1 = length(W); % The number of the endogenous variables in the reduced
model.
%
% Rearranging the matrices
%

```

```

alamb=abs(diag(VO));
[lambs, lambz]=sort(alamb);
V=VO(lambz,lambz);
P = PO(:,lambz);
%
% Partitioning the matrices
%
P11 = P(1:n,1:n);
P12 = P(1:n, n+1:n1);
P21 = P(n+1:n1,1:n);
P22 = P(n+1:n1,n+1:n1);
%
PP = inv(P);
PP11 = PP(1:n,1:n);
PP12 = PP(1:n, n+1:n1);
PP21 = PP(n+1:n1,1:n);
PP22 = PP(n+1:n1,n+1:n1);
%
V1 = V(1:n,1:n); % The Partition of the Jordan Matrix.
V2 = V(n+1:n1, n+1:n1);
%
Rx = R(1:n, :);
Rr = R(n+1:n1, :);
%
Qx = Q(1:n, :);
Qr = Q(n+1:n1,:);
%
Phi0 = PP21*Rx + PP22*Rr;
Phi1 = PP21*Qx + PP22*Qr;
Phi01 = Phi0*pai + Phi1;
%
n2 = size(mce);
n3 = n2(2);
%
% Making a Matrix, Psi
%
Psi=zeros(n1-n,n3);
%
for i = 1:n1-n;
    %
    for j=1:n3;
        %
        Psi(i,j)=-(Phi01(i,j)/(1-inv(V2(i,i))*pai(j,j)));
        %
    end;
    %
end;

```



```

end;
%
Psi = (V2)\Psi;
%
GUX0 = [eye(n);-(PP22)\PP21];
GUZ0 = [zeros(n,n3);(PP22)\Psi];
%
% Outputs, The Coefficients for the Policy Functions.
%
GXX = P11*V1*inv(P11);
GXZ = (P11*V1*PP12 + P12*V2*PP22)*inv(PP22)*Psi+Qx+Rx*pai;
GUX = inv(mcc)*mcs*GUX0;
GUZ = inv(mcc)*mcs*GUZ0+inv(mcc)*mce;
M = [ GXX GXZ; zeros(n3,n) pai];
%
%%%%%%%%%%%%%% The End of the Program %%%%%%%%%%%%%%%

```

10 結果

前節のプログラムで得られる Policy Functions は、以下の通りである。

$$dc_t = 0.6013dk_t + 0.4305dz_t, \quad (121)$$

$$dl_t = -0.2291dk_t + 0.6481dz_t, \quad (122)$$

$$dk_{t+1} = 0.9427dk_t + 0.1362dz_t. \quad (123)$$

資本が増大すると、消費は増大する。これは、資本が増大すれば、生産高が増大し、産出量が増大するためである。生産性への正のショック z_t の増大も、消費を増大させる。これは、当期の総生産を増大させることと、我々の仮定により、 z_t は AR1 に従うため、将来の生産性もある期間は増大するためである。一方、労働供給は、資本の減少関数となっている。資本の 1% の増大は労働の限界生産性を $\theta\%$ 増加させる。しかし、今期の資本の増大は将来の資本も増加させるため、来期の労働の限界生産性も、ほぼ同程度増加する。すると、長期にわたり労働の限界生産性は増大することになり、所得効果が働く。我々の仮定では余暇は上級財であるため、所得の増加は余暇消費を増加させる。また、資本の増大は資本の限界生産性、すなわち金利を低下させる。金利の低下は、現在労働し、貯蓄するよりも、将来労働し貯蓄するように、合理的な消費者を誘導する。すなわち、今期の資本の増大は、労働供給を金利の低下と生涯所得の増加の 2 つの経路により、減少させるのである。

z_t が 1 単位増加すると、消費、労働供給、いずれも増大する。消費が増加する理由は、生産性の上昇が総生産水準を増加させるためである。労働供給の場合は、多少複雑である。資本の増加と同様、 z_t の増加は労働の生産性を増加させ、しかもその効果は持続する。その結果、生涯所得が増加し、資本の増大と同様に、労

働供給を減少させる効果をもつ。だが、我々は z_t は AR1 であると仮定したため、将来の限界生産性の上昇分は、今期よりも小さいものとなっている。すなわち、今期の賃金は、将来の賃金よりも高いのである。合理的な消費者は、今期の高い賃金のもとで多く働き、将来は余暇を消費することを選択する。また、 z_t の増大は資本の限界生産性、すなわち金利を上昇させる。資本の増大とは逆に、この場合、合理的な消費者は、今期に労働所得を得て貯蓄することを望むであろう。すなわち、金利の変化は労働供給を増加させる効果をもつ。以上の2つの効果は、生産性の向上による生涯所得の増加という所得効果を上回り、 z_t の増大は、今期の労働供給を増加させるのである。賃金の将来水準と今期の水準の相対的な大きさ、および金利の変化による労働供給への効果のことを余暇の異時点間代替、といい、Lucas 以来、新古典派的なマクロ経済学において採用されているものである。

以上の効果は、実際に Impulse Response Functions を観察することで確認できる。1% の正の技術ショックが生じた場合のケースを図は示している。技術ショックに対し、消費は Policy Functions が予告するように、0.43% 上方へジャンプする。労働供給も 0.65% 上昇する。労働供給の 1% の増加は、総生産高を $(1 - \theta) = 0.6\%$ 増加させる。結果として、労働供給の増加は、総生産を 0.389% 増加させる。技術ショックそのものは、総生産を 1% 増加させるため、合計して、当期の総生産は 1.389% 増大する。

賃金の増大は、金利に比べて小さい。いずれも、技術ショックの直接効果は 1% の増加であるが、今期の資本は前期の投資により決定されているため (Predetermined である)、資本水準は変化できない。変化させることができるのは労働力であり、労働供給は上昇している。その結果、限界生産性の増加は、労働供給の増加のために目減りする。一方、金利、すなわち資本の限界生産性は、労働力が増加するために、直接効果以上に上昇する。

他のパラメーターの下では、この Policy Functions はどうなるかは、各自で実験してもらいたい。例えば、 z_t の持続度、 η が非常に小さい場合は、余暇の異時点間代替が非常に強くなり、労働供給の Policy Functions の dz_t の係数は大きくなることが予想される。一方、消費に関しては、恒常所得の増分が小さくなるため、消費の z_t への感応度は低下することが予想される。

Table 1.1
Cyclical Behavior of the U.S. Economy: Deviations from Trend of Key Variables, 1954:I-1991:II

Variable	SD%	Cross-Correlation of Output with:										
		x(-5)	x(-4)	x(-3)	x(-2)	x(-1)	x	x(+1)	x(+2)	x(+3)	x(+4)	x(+5)
Output component												
GNP	1.72	.02	.16	.38	.63	.85	1.0	.85	.63	.38	.16	-.02
Consumption expenditures												
CONS	1.27	.25	.42	.57	.72	.82	.83	.67	.46	.22	-.01	-.20
CNDS	0.86	.22	.40	.55	.68	.78	.77	.64	.47	.27	.06	-.11
CD	4.96	.24	.37	.49	.65	.75	.78	.61	.38	.11	-.13	-.31
Investment												
INV	8.24	.04	.19	.38	.59	.79	.91	.76	.50	.22	-.04	-.24
INVF	5.34	.08	.25	.43	.63	.82	.90	.81	.60	.35	.09	-.12
INVN	5.11	-.26	-.12	.05	.30	.57	.79	.88	.83	.60	.46	.24
INVR	10.7	.42	.55	.65	.72	.74	.63	.39	.11	-.14	-.33	-.43
Ch. INV	17.3	-.03	.07	.22	.38	.53	.67	.51	.27	.04	-.15	-.30
Government purchases												
GOVT	2.04	.03	-.01	-.03	-.01	-.01	.04	.08	.11	.16	.25	.32
Exports and imports												
EXP	5.53	-.48	-.42	-.29	-.10	.15	.37	.50	.54	.54	.52	.44
IMP	4.88	.11	.19	.31	.45	.62	.72	.71	.52	.28	.04	-.18
Labor input based on household survey												
HSHOURS	1.59	-.06	.09	.30	.53	.74	.86	.82	.69	.52	.32	.11
HSAVGHRS	0.63	.04	.16	.34	.48	.63	.62	.52	.37	.23	.09	-.05
Labor input based on establishment survey												
HSEMPLMT	1.14	-.10	.04	.23	.46	.69	.85	.86	.76	.59	.40	.18
GNP/HSHOURS	0.90	.06	.14	.20	.30	.33	.41	.19	.00	-.18	-.25	-.24
Labor input based on establishment survey												
ESHOURS	1.69	-.12	.07	.38	.54	.78	.92	.90	.78	.63	.42	.21
ESAVGHRS	0.48	.14	.26	.42	.58	.68	.62	.45	.22	.05	-.15	-.30
ESMPLMT	1.41	-.19	-.01	.22	.47	.72	.89	.92	.86	.73	.55	.34
GNP/ESHOURS	0.73	.35	.44	.44	.45	.34	.34	.10	-.09	-.30	-.38	-.42
Average hourly earnings based on establishment survey												
WAGE	0.757	.20	.35	.47	.58	.66	.68	.59	.46	.29	.12	-.03
Average hourly compensation based on national income accounts												
COMP	0.55	.24	.25	.21	.14	.09	.03	-.07	-.09	-.09	-.09	-.10

Notes: GNP—real GNP, 1982\$; CONS—personal consumption expenditure, 1982\$; CNDS—consumption of nondurables and services, 1982\$; CD—consumption of durables, 1982\$; INV—gross private domestic investment, 1982\$; INV—fixed investment, 1982\$; INV—nonresidential fixed investment, 1982\$; INV—residential fixed investment, 1982\$; Ch. INV—change in inventories, 1982\$; GOVT—government purchases of goods and services, 1982\$; EXP—exports of goods and services, 1982\$; IMP—imports of goods and services, 1982\$; HSHOURS—total hours of work (Household Survey); HSAVGHRS—average weekly hours of work (Household Survey); HSEMPLMT—employment (Household Survey); ESHOURS—total hours of work (Establishment Survey); ESAVGHRS—average weekly hours of work (Establishment Survey); ESEMPLMT—employment (Establishment Survey); WAGE—average hourly earning, 1982\$ (Establishment Survey); COMP—average total compensation per hour, 1982\$ (National Income Accounts). The Establishment Survey sample is for 1964:I-1991:II.

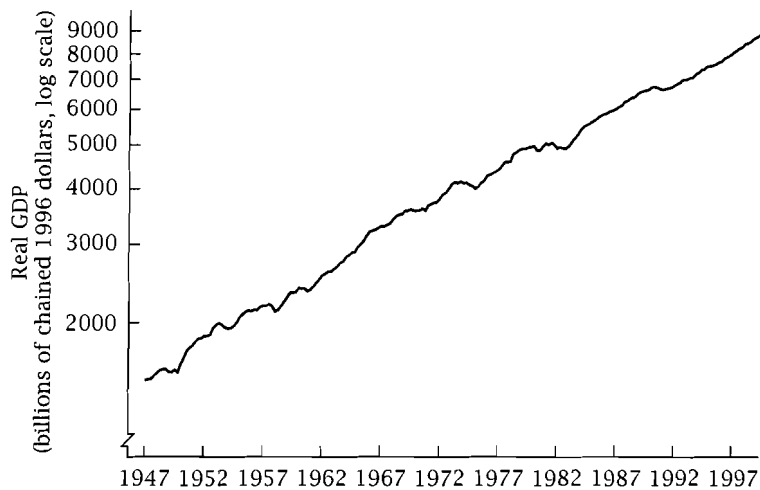


FIGURE 4.1 U.S. real GDP, 1947-1999

TABLE 4.1 Recessions in the United States since World War II

Year and quarter of peak in real GDP	Number of quarters until trough in real GDP	Change in real GDP, peak to trough
1948:4	2	-1.7%
1953:2	3	-2.7
1957:3	2	-3.7
1960:1	3	-1.6
1970:3	1	-1.1
1973:4	5	-3.4
1980:1	2	-2.2
1981:3	4	-2.9
1990:2	3	-1.5

